

白雲片片

第十二回

毘盧頂上を

踢んで行くべし

今回は南陽慧忠禪師（大証国師）が登場する古則を紹介致します。

正法眼蔵三百則 第二十六則

「西京光宅寺大証国師、因みに唐の

肅宗皇帝問う、如何ならんか是れ無諍三昧。師云く、檀越、毘盧頂上を踢んで行くべし。帝云く、寡人、会せず。師云く、自己の清浄法身を認むること莫かれ。」

現代語訳／帝は肅宗皇帝、師は南陽慧忠禪師のことです。

中国の河南省にある西京（洛陽）の光宅寺に住んでいた大証国師（南陽慧忠禪師）の話です。中国の唐の時代、皇帝だった肅宗が南陽慧忠禪師に質問をしました。

帝「仏の教えにある無諍三昧というのは一体どういうものですか？」

師「仏教の後援者である皇帝よ、毘盧遮那仏の頭を踏んで行きなさい。」

帝「私には、和尚さんの言っていることの意味が分かりません。」

師「あなた自身が、宇宙と一体の清らか

な性質を備えていることを、頭の中で考えて納得するのはやめたほうが良い。」

肅宗皇帝が質問している無諍三昧とこののは諍い（争い）が無い境地ということで、正しい姿勢で坐禅をやっている人がイライラしたり悩んだりせず、冷静で落ち着いている状態を指しています。なかなかやらないことかもしれません。が、例えば自分はどうもイライラして自分で手にも負えないと分かった時にすぐさま姿勢を整えて坐禅をしてみると、きつと先ほどまでのイライラがかなり軽減、もしくははいつの間にか無くなっていることだと思えます。

私は最初、皇帝の質問に対する南陽慧忠禪師の返事の意図がよくわからなかったのですが、太陽の化身と呼ばれ、その大きな光で宇宙全体を照らすと言われているとても有りがたい仏さまである毘盧遮那仏の頭を踏んでその先へ前進して行けということです。こここのころは最後の「自己の清浄法身・・・」のところと関係があるようです。

肅宗皇帝はその答えを聞いた時、よく意味が分からなかったので正直にそれを告げました。

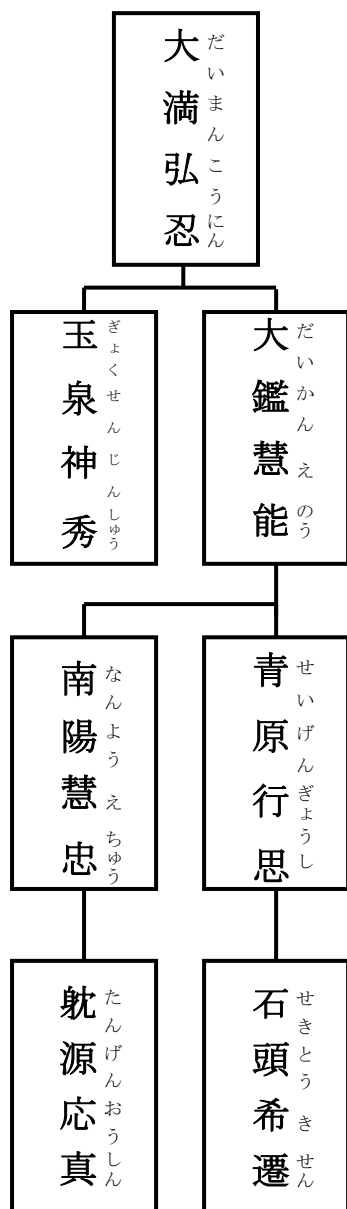
最後の南陽慧忠禅師の答えについては、
「清浄法身」というのは宇宙の
全ての存在は清らかであり、全ての存在
が宇宙そのものと同じ性質を備えてい
るから、もちろん自分自身もそうだとい
うことです。これは文字言語の上での意
味としてはそう難しくないので、坐
禅の体験から生まれた言葉ですから、文
字言語の意味を理解しただけでは「無諍
三昧」なども同じく、実際に体験しない
ことにはそれが分かったことにはなら
ないはず。何でもそうだと思います
が、体験内容をいくら人から説明して
もらったり本で読んだとしても実際にや
ってみないことには自分がやったこと
にはならないからです。

南陽慧忠禅師の内心は、あなたに無諍
三昧の言葉の意味を教えたとしても、実
際に坐禅をしないと無諍三昧の本当の
意味は分からないよ、という感じだった
かもしれません。

南陽慧忠禅師（大証国師）は和文の
正法眼蔵にも何度か登場されています

が、道元禅師は「即心是仏」の巻の中
でこう述べておられます。

「大証国師は曹溪古仏の上足なり、天
上人間の大善知識なり。国師のしめす
宗旨をあきらめて、参学の亀鑑とすべ
し。（中略）近代大宋国に諸山の主人と
あるやから、国師のごとくなるはある
べからず。むかしより国師にひとしか
るべき知識、いまだかつて出世せず。
しかあるに世人あやまりておもはく、
臨済、徳山も国師にひとしかるべしと、
かくのごとくのやからのみおほし。あ
はれむべし、明眼の師なきことを。」
訳／「南陽慧忠禅師は大鑑慧能禅師の
弟子の中でも上席であり、また天上界
人間界における偉大な指導者である。
したがって、南陽慧忠禅師が示される
教えを解明して仏教を学ぶ上での手本
としなければならぬ。（中略）近頃、
宋の国においても寺院の代表の立場に



ある多くの連中にさえ、南陽慧忠禅師
と同一の見解の者はいない。南陽慧忠
禅師と肩を並べる優れた指導者は未だ
かつてこの世に出現したことがない。
しかし、世の中の人は誤って、臨済義
玄禅師や徳山宣鑑禅師も南陽慧忠禅師
と同等だろうと考えており、そう思っ
ている人がとても多い。このように、
明晰な見識を備えた指導者がいないと
いうことは悲しむべきことである。」

ここの部分はそれ以前に文章があり
ますので本当はそれも併せて読むべき
だと思えますが、南陽慧忠禅師がいか
に仏教に精通した方であったかとい
うことは正法眼蔵が伝えるところだけ
も十分ご理解頂けるかと思えます。
参考文献／西嶋和夫著「真字正法眼蔵
提唱上巻一」、「現代語訳正法眼蔵第一
巻」、駒沢大学編「禅学大辞典」